2009年 秋号

僧伽

第67号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL（076）241－5219
題字　本多　千翠

露と落ち
露と消えにし　我が身かな
浪速のことは　夢のまた夢

豊臣秀吉の辞世の句。権力をほしいままにし、波乱万丈の生涯を送った秀吉が、最後に到達したのは無常観漂う仏教的境地であったとは言えないだろうか。

長浜別院「大通寺」

常徳寺　西山　彰

先日、学生時代に所属していた美術サークルの同窓会で、滋賀県長浜市へ行った。長浜の市街を散歩する途中、長浜別院、大通寺に立ち寄った。

この寺は私たち真宗大谷派の門徒にとって、特別な意味を持っている。本願寺第十二世教如上人を開基とする寺なのだ。一向一揆の際、信長に最後まで徹底抗戦を主張された上人は、ここ長浜の地で再起を期されることになった。（「真宗豆知識」参照）

やがて徳川家康から許可を得て、上人は京都に東本願寺を興される。それにともない、長浜の念仏道場は、「大通寺」を名乗るようになった。

さて大通寺の本堂の歴史は、この寺の数奇な成り立ちを象徴している。格調高いこの建物は、もともと伏見城の殿舎であったという。それが移築されて、東本願寺の御影堂となった。さらにそのの承応年間（一六五二～四）に、本堂として当寺に移された。

本堂だけでなく、七千坪の境内には、伏見城の遺構が数多く見られる。書院や大広間には狩野派（永岳、山楽、山雪）、円山応挙など当代一流の絵師の手になる襖絵がずらりと並び、迫力満点だ。

栄枯盛衰は世の定めであるが、もし関が原の戦いで西軍が勝利していたら、これらの作品は今も伏見城の襖を飾っていたのだろうか。太閤秀吉の時代に豪華絢爛に咲き誇った桃山文化の名品が、紆余曲折を経て、現在も長浜の町にひっそりと息づいていることに感慨を禁じえない。それはまた、乱世の激流に翻弄されながらも、今なおこの地で盛んな浄土真宗の歴史であるようにも思えてならない。

復讐劇『モンテ・クリスト伯』に込められる「希望」

西山　彰

夏休みの図書館は、宿題を抱えた子供たちでにぎわっている。私も小学4年生の息子を連れて泉野図書館に出かけた。読書感想文を書かせるのに、何か適当なものはないかと思ったのだ。

児童向けの図書を数冊物色していた私は、一冊の本を手にした。それはアレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』だった。（デュマは『三銃士』で有名なフランスの大衆作家である。）

日本では『巌窟王』（がんくつおう）という題名で紹介されることの多い物語である。子供のころ読みたいと思いながら、つい機会を逃してしまった一冊だった。予想した通り、この本は、いったん手にとって読み出すとやめられないほど面白かった。

舞台はナポレオンの時代のフランス。主人公は、幸せな日々をおくっていた船乗りダンテス。彼は悪人たちの陰謀で無実の罪で逮捕され、婚約者を奪われた上、14年間もの間陰惨な牢獄に閉じ込められることになる。

奇跡的に脱出したダンテスは、「モンテ・クリスト伯」と名を変え、彼を陥れた三人の男たちに復讐を始める。（ここからはらはらどきどきの息もつかさぬエンターテイメントが始まるのだが、その内容は割愛させてもらおう。）

知力と財力を兼ね備えたクリスト伯は、一人目、二人目と復讐に成功し、いよいよ三人目の男をあと一歩まで追い詰める。ところが、なぜかその時点で復讐を思いとどまるのだ。

彼はこんなことを言う。「わたしは、あなたの仲間のひとりを死なせ、ひとりを狂わせた……わたしもまた、許されなければならぬ人間になったのです。……。」

この言葉には、人間ダンテスの深い苦悩が滲んでいる。あるいはまた、父と仰ぐファリア司祭の声が彼の耳に聞こえたのかも知れない。

牢獄で偶然めぐり合ったファリア司祭は、豊かな教養と生活の知恵に溢れた老人だった。そして司祭は4年間かけて自分の知力のすべてをダンテスに注ぎ込んだのだった。暗い牢獄の中で絶望し自ら死を選ぼうとしたダンテスだったが、司祭との出会いが彼に一筋の希望を与えた。そして若いダンテスは、皮肉にも牢獄の中で教育を受け、一人前の人間となったのだった。

どんなに正当な理由があろうとも、復讐することはそれ自体罪である。どんなに見事に復讐を果たしたところで、心は救われない。燃え上がる復讐心を抑えることができなかったダンテスであったが、一方でその空しさに気が付くほどに成熟していたのだ。

復讐は復讐を生み「連鎖」となっていく。復讐は希望のない行為である。

物語を読み進めてゆくにつれて、希望こそがこの物語を貫くテーマであることが次第に明らかになっていく。彼が最後に残した言葉、「待て、そして希望せよ。」が強く心に残る。

「復讐することは罪である」これは確かに真実かも知れない。しかし私たちが容易に到達できない真実であろう。それを可能にするのは、明日に生きようとする者の前向きな希望のみであると作者は教えてくれているに違いない。

単なる復讐劇とばかり思っていたが、やはり古典的名作となるとひと味もふた味も違うものだと感心させられた。そして私はこの本をぜひ子供に読ませたいと思った。たとえ今充分に意味が汲み取れなくても、いずれ分かってくれる日がくるものと希望したいのだ。

（講談社「モンテ・クリスト伯」（村松具視訳）は児童向けの図書であり、現在販売されているかどうかも不明なため、拙稿は、「本の紹介」ではなくエッセイのかたちをとらせていただきました。）

和讃（わさん）に学ぶ　第二十九回

徳法寺　杉谷　淨

念仏弾圧

最近、通夜や葬儀でさえも、念仏を称える声を聞くことが少なくなっています。そういう私も、お参りの時以外に自然と念仏が口から出るかというと怪しいものです。ちょっと恥ずかしいということもあるのでしょうが、念仏の教え自体が生活の中から希薄になっていることは確かなようです。

いまでは影が薄くなってしまった念仏ですが、念仏を称えたくてもそれさえ容易ではない時代がありました。親鸞聖人が生きていた時代はまさにそうでした。

五濁の時機いたりては
道俗（どうぞく）ともにあらそいて
念仏信ずるひとをみて
疑謗破滅さかりなり

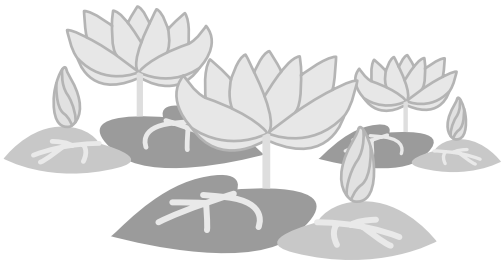
これはそのような状況を親鸞聖人が詠われた和讃です。

五濁とは『仏説阿弥陀経』に出てくる劫濁・見濁・煩悩濁・衆生濁・命濁の五つの濁りです。劫とは時間のことですから、時間が濁り、見方が濁り、煩悩が濁り、生きとし生けものが濁り、命が濁っているというのです。この言葉は、諸仏が釈迦如来に対して、このような濁りのためにものがはっきりと見えなくなっている中で、よく釈迦如来が悟りを開かれましたと褒め称えているという形で使われています。

道とは仏道を歩む僧侶のことです。俗は俗世間を生きる僧侶以外の人を指します。ですから親鸞聖人は、ものがはっきりと見えない時代にあって、僧侶もそれ以外の人も、争って念仏するものを疑い誹謗し破壊し滅ぼそうとしている、と言っておられるのです。

これは親鸞聖人が漠然とそのように感じていたということではありません。奈良の興福寺や比叡山延暦寺からは法然上人の説く念仏の教えは仏教ではないと幾度となく非難され、朝廷や鎌倉幕府からも念仏禁止の命令が何度も出され、念仏申したということで死罪になった者や、親鸞聖人のように流罪になった者が大勢出ているのです。親鸞聖人の時代はまさに命がけで念仏申していたのです。逆に言うならば、命を賭けてでも申す値が念仏にはあったということです。これは単に念仏の教えこそが仏教であるということではなく、念仏申さなければ、この私が本当に救われることはあり得ないのだという強い確信が親鸞聖人はじめとする法然上人の門下生にあったということでしょう。

私の口から念仏が漏れ聞こえてこないということは、このような確信が私にはないということです。あいまいな者に非難誹謗する者などいるはずもありません。人畜無害な扱いやすい人間ですから。これは私が何が幸せであるのかさえ見えないほどにひどい濁りの中で日々を送っているからかもしれません。このような前も見えないような濁りのなかで、どちらに向いて歩いていけば分からない私に、見えないながらもとりあえず念仏申して歩いて行けと親鸞聖人が勧めておられる気がします。迷っているだけでは何も変わりませんから。先人たちの足跡をたどって見えない世界を歩んでいければと思います。



真宗人物伝

第十六回

徳法寺　杉谷　淨

慈円

今回は慈円大僧正です。この人は、浄土真宗の歴史の中では、京都の青蓮院で親鸞聖人の得度を行った人として伝わっていますが、日本仏教の歴史の中でも屈指の僧侶でもあるのです。

まず父は摂政関白太政大臣であった藤原忠道です。一一五五年に生まれていますから親鸞聖人より十八歳年上になります。幼いときに青蓮院に入寺し、十二歳で得度します。そして三十八歳で比叡山延暦寺の最高位である第六十二世天台座主になります。この天台座主には誰でも就けるというものではありません。初期と近代を除けば、ほとんどが皇族もしくはそれに準ずる貴族の出身者に限られます。ですからもし親鸞聖人が生涯比叡山にいたとしても天台座主になることはあり得ませんでした。その後、慈円は第六十五、六十九、七十一世と計四度にわたり天台座主に就任します。一人で複数回任命されることは珍しくありませんが、四度も務めたのは長い延暦寺の歴史の中でも他に尊圓法親王だけです。この事でもいかに慈円が傑出した僧侶であったかがうかがえます。ちなみに現在の天台座主は、二百五十六世の半田孝淳氏です。

また慈円は僧侶としてだけではなく、独自の歴史観から神武天皇から順徳天皇に至る歴史と、その歴史を動かす「道理」とを仮名文でつづった『愚管抄』を著したことでも知られています。歌人としても名高く、『新古今集』など歴代の勅撰集に多くの歌が収められ、中でも小倉百人一首に前大僧正慈円の名で収められている

おほけなく　うき世の民に
　おほふかな　わが立つ杣に
　　墨染めの袖

は有名です。

慈円の異父兄には、親鸞聖人の師である法然上人を庇護していた九条兼実がいます。ただ慈円自身は法然上人の説く専修念仏には批判的で法然上人、親鸞聖人の流罪にも関わっています。ただし同じく法然上人の弟子である西山浄土宗の祖証空上人は慈円の弟子でもありますから複雑です。

最後に親鸞聖人を得度したという話は、現在真実ではないという説が有力です。親鸞聖人が九歳のときには慈円はまだ得度することができる立場にありませんでしたし、青蓮院の場所も今とは違い比叡山の中にあったからです。また親鸞聖人自身はそのようなことは一言も言っていません。当時高名であった慈円の名を後の人が持ち出したというのが真相のようです。

真宗豆知識

一向一揆と東西分派

一面で長浜別院のことを書かせていただいたので、少し補足させていただきたいと思います。

戦国時代のはじめ、蓮如上人は他力念仏の教えをひろげるため、全国各地を遊化されました。

やがてその活動は、戦国乱世の中で、一向一揆という形をとってゆくことになります。一揆勢力が、冨樫政親を滅ぼして、約一世紀の間加賀の国を支配したことは私たちもよく知っている通りです。

近江国もその布教活動の最大の拠点のひとつであり、北近江での真宗寺院の中核が現在の大通寺でした。

一向一揆は、織田信長との十年にわたる石山合戦においてその頂点を迎えます。そして天正八年（一五八〇）三月、本願寺法主顕如上人と信長の間に和睦が成立します。ところが法主の嫡男教如上人は、徹底抗戦を主張され、長浜から諸国に檄を飛ばされました。

これに応じて教如上人とともに戦ったのが、湖北の門徒たちでした。やがて信長の手によって一揆は鎮圧され、教如上人は長浜で蟄居させられることになります。

時代は変わり豊臣秀吉は、教如上人の弟准如上人に土地を与え本願寺を再興されます。さらに時を経て、教如上人は徳川家康に許されて東本願寺を創建します。これが東西本願寺の分派であり、真宗大谷派の始まりです。

ちなみに石川県で東本願寺を本山とする真宗大谷派の寺院が多いのは、加賀の国には、教如上人に同情的な門徒が多く、行動をともにしたからであると言われています。

歴史と真宗の町長浜へは、千円高速を利用して金沢から長浜インターまで二時間足らず。一度お出かけになってみればいかがでしょうか。

（彰）

「御絵伝」でたどる親鸞聖人のご生涯(12)

九卿僉議(2)

天下の訴訟を評定する京都御所の仁寿殿である。九卿とは、公卿の中国風の言い方である。場面は、その九卿によって、法然上人以下十二名の行状についての僉議が行われているところである。

その結果出された罪状は、歎異抄後序の記録によれば、四人が死罪、八人が流罪（うち執行猶予は二人）というきわめて厳しい内容であった。

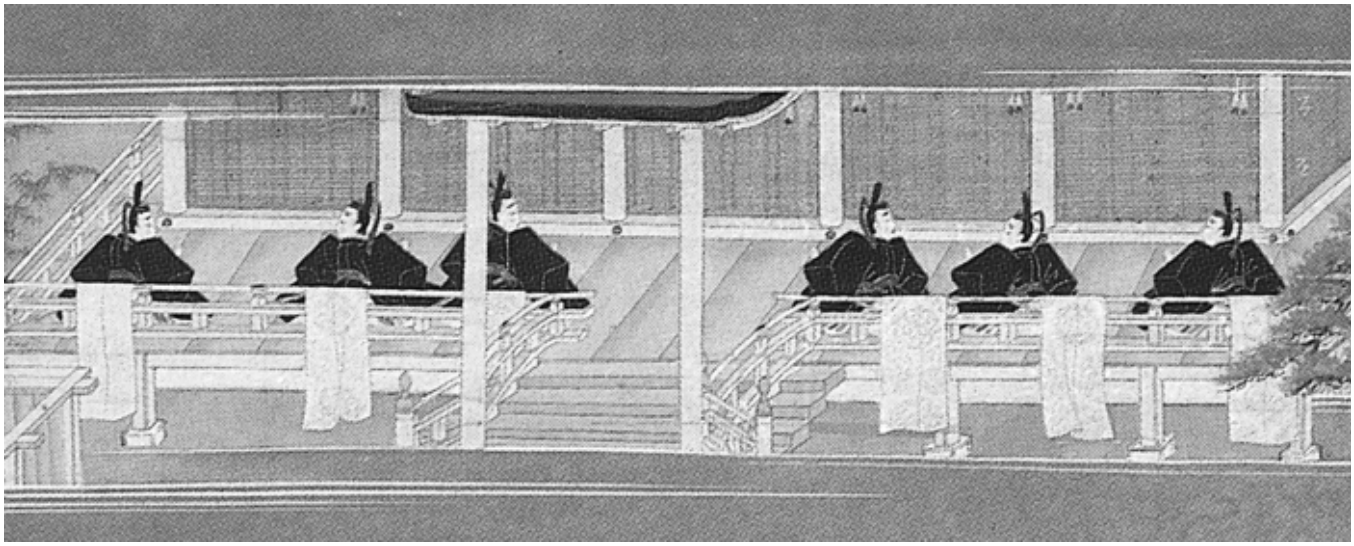
死罪　安楽房　住蓮房
　　性願房　善綽房
流罪　法　然（土佐国）
　　浄聞房（備後国）
　　禅光房（伯耆国）
　　好覚房（伊豆国）
　　法本房（佐渡国）
　　親　鸞（越後国）
　　善恵房、成覚房
　　（慈円が身柄預かり）

この歎異抄の記録は、事件の顛末を記す数少ない資料のひとつであるが、なぞが多い。法然上人と死罪の四人はともかく、後の七人はどのようにして選ばれたのか判然としないのである。三百余名あったといわれる法然門下のうち、なぜこの七人だったのか、そしてなぜその中に親鸞聖人が入っておられたのか。

もし聖人が才能が優秀なゆえに選ばれたというなら、信空を筆頭に他に優秀な先輩が数多くいたのに、彼らが選ばれなかったのはなぜか。いずれも決定的な理由は見つかっていない。

左には「呉竹の台」、右に橘が描かれているが、竹は古来君子の徳をあらわすものとされてきた。天下の政道の正しさを象徴して植えてあるが、不当な評定への風刺としてここに描かれているのである。

（彰）



杉谷淨のラジオ案内

十月六日(火)、十一月三日(火)、十二月一日(火)、一月五日(火)です。午後一時半からFM-N1(七十六・三MH)で放送します。再放送は同日の深夜一時からと放送日の週の土曜夜八時からの二回です。

インターネットでも聞けますのでご意見等頂ければ嬉しく思います。

『心の相談室』

毎月第四土曜日
午後三時～五時
東別院横
「いちょう館」二階

相談料無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等に、僧侶が対応します。

本の紹介

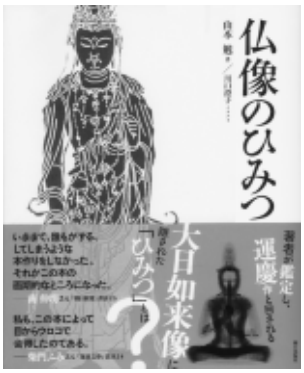
「仏像のひみつ」

山本　勉　著
朝日出版社
一、四〇〇円＋税

とってもわかりやすい仏像についての入門書です。何が書かれているかというと、仏像の種類が絵や写真を交えて説明されているのです。

まず如来や菩薩、明王（みょうおう）、天について説明されています。例えば、如来は歯が四十本あるとか（人は二十八～三十二本）舌が顔よりも大きくて舌で顔を包めるとかいうことが、かわいらしい絵で描かれています。千手観音が手に持っているものは何かとか、普段何気なく見ているものがなるほどと頷けます。

次が仏像の作り方による種類です。大きく分けると



銅でつくる銅像と、粘土でつくる塑像、漆でつくる乾漆像、木でできた木彫像、石でできた石像に分けられます。それぞれの作り方を歴史などを交えてこれもわかりやすく書かれています。

次は時代ごとの仏像の変化です。実は仏像はそのつくられた時代で痩せたり太ったりしているのです。これは私も知りませんでした。実はこの本の著者は仏教の専門家ではなく彫刻の専門家なのです。もちろん仏教についてもかなりの知識を持っておられるのですが、このあたりはさすがに目の付け所が違います。なにしろ仏像を輪切りにした形の変化なんてとても私には気が付きませんから。

最後が仏像のおなかの中です。実は仏像の中にはいろいろな物が収められていることが多いのです。お経であったり、水晶であったり、小さな仏像であったりさまざまです。今はX線写真があるので、仏像を壊さないままでも中の様子が見て取れるのです。

この本はこの手の本としてはかなりの売れ行きを記録したので、現在続刊として「続仏像のひみつ」も出ています。仏教の入門書としても宗派を問わず読むことができますのでご一読下さい。

（淨）

各寺のご案内

◆徳法寺

金沢市野町
二丁目三三―四
TEL二四一―五二一九

◎お講

毎月二十一日
午後七時半より
講師
十月　幸村　明
十一月　杉谷　淨
十二月　荒木　範夫
一月　杉谷　淨

◆常徳寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◎報恩講

十月十日（土）
午前十時よりお逮夜
午後一時半よりお日中
お説教
春秋　賛師

編集後記

この号から西山さんとの二人での『僧伽』が始まりました。実は前号から印刷所も変えています。写真が綺麗になったのに気付かれましたか？政権党も変わり私と同世代の人たちが次々と大臣になっています。それだけ私も年を重ねたということです。何もかも変わっていく中で、今できることをコツコツやっていこうと思います。これからもよろしくお願いします。

（淨）

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　淨（徳法寺）